

がんと‘らしく向きあう’

～患者さんと医療者のより良いパートナーシップのために～

納得のいく医療を受けるための 患者さんの心構え

日時：2009年10月17日(土) 14:00～16:30

場所：東京丸ビル8階 コンファレンス ルーム

共催：アストラゼネカ株式会社・株式会社エビデンス社

後援：財団法人日本対がん協会

講演1

「患者さんが納得のいく医療を受けるためのポイント」

上野直人さん(テキサス大学M.D.アンダーソンがんセンター腫瘍内科教授)

講演2

「乳がん体験に学ぶ 地域でより良い医療を受けるために」

金井弘子さん(「りんぱの会」、千葉乳がん患者の会「ねむの会」代表)

患者さんと医療者のより良い パートナーシップを築くことが大切



「患者さんが医療チームの一員になってゴールを共有することが大切」と話す上野さんと講演中の金井さん



2009年10月17日、アストラゼネカ(株)、(株)エビデンス社共催、(財)日本対がん協会後援で、セミナー「がんと「らしく向きあう」～患者さんと医療者のより良いパートナーシップのために～」が、東京都内で開催された。講師は、テキサス大学M.D.アンダーソンがんセンター腫瘍内科教授の上野直人さんと、「リンパの会」、千葉乳がん患者の会「ねむの会」代表の金井弘子さん。参加者は、がんとより良く向きあうための心構えについて、熱心に聴き入っていた。

取材・文●江口敏

教授の上野直人さんは、基礎医学の知識を臨床の現場に還元することで、患者さんの苦しみを少しでも減らすことをモットーに、ご自身のがん体験もふまえ、精力的に患者さんを中心としたがんチーム医療(チーム・オンコロジ)を推進している。

上野さんの講演テーマは、「患者さんが納得のいく医療を受けるためのポイント」。上野さんはまず、「日本のがん医療の質を良くしていくためには、患者さん自身が、がん医療に積極的に参加する意志を持つことが不可欠です」と強調する。

上野さんが推進しているがんチーム医療では、患者さんを囲んで、3つのチームが構成されている。チームAは、医師、看護師、薬剤師など、直接治療を

担当するチーム、チームBは、ソーシャルワーカー、スピリチュアルケアなど、精神的な側面から患者さんをサポートするチーム、チームCは、家族、友人、基礎研究部門、製薬メーカーなど、患者さんや医療を周縁からサポートするチーム。上野さんは、「患者さん自身と3つのチームが一体となって、医療の方向性を決めるのです」と説く。

そして、「患者さんが満足する医療とは、①病気が治る、②QOL(生活の質)が改善する、③納得できる——の3つであると考えていますが、これを実現するには、医療チームと患者さんが対等の関係を築き、患者さんが医療チームの一員になって、ゴールを共有することが大切です」と上野さんは言うのである。

最高のがん医療を受けるための 患者さんの心構え9カ条

ただ、患者さん自身が意識改革をし、がん医療のシステムを変えるのは、決して容易なことではない。そこで、上野さんは、患者さん自身が最高のがん医療を実現するために必要な、「患

がんチーム医療では 患者さん囲み3つのチーム

全米1のがんセンターといわれる、テキサス大学M.D.アンダーソンがんセンターの腫瘍内科

者さんの心構え9カ条」を提言。

①「がんは慢性病である あせらない」——がんになったら、「これからマラソンを走る」と思うべきである。ゴールは遠い。いかにペースをつくるかが重要だ。

②「医師と話した内容をしっかりと理解する」——医師と話をするときには、できるだけ家族や友人を伴うこと。1人では、医師の話をしっかりと聞くことが困難であるのでメモを取ったり、医師の了解のもとに、録音をするのもいい。

③「医師の話した内容をかみくだいて理解する」——医師は患者さんが日頃聞き慣れない難しい専門用語を使う。理解できないときは、「わからない」とはっきり言い、紙に書いてもらったり、わかりやすい本や、ネットのサイトを教えてもらう。

④「質問上手になる」——医師と話をしているときは、質問のタイミングが難しい。質問する内容を事前に整理し紙に書いて医療者に渡しておくなど、質問方法を工夫をし納得いくまで確認することが大切だ。

⑤「医師の話した内容を消化する」——医師から聞いたことを、

家族や友人に話して、相手が理解できれば、自分も理解できたことになる。そして、医師にも理解したことを伝える。

⑥「受けている治療は標準療法かどうか確認する」——標準療法であることは大事である。そうでない場合、なぜ標準療法でないか、医師に説明してもらい、納得の上で治療を受けることが必要。

⑦「自分にとってベストな治療をさがす」——治療を受けるとき、その治療が本当にプラスになるのか、どんなプラスをもたらすのか、確認する必要がある。がんが小さくなるのか、長く生きられるのか、生活の質が良くなるのか、きちんと把握しておくことが必要。

⑧「自分の希望を伝える」——医師はできるだけ患者さんの要望を取り入れながら、がん治療の個別化を図っている。しかし、多くの患者さんを診ている医師にとって1人ひとりの患者さんの希望を覚えていることは困難であり、患者さんの希望も変化するるので、患者さんは医師に繰り返し、繰り返し希望を伝えておくことが大切だ。

⑨「恐れずに果敢にチャレンジする」——治療に納得ができない場合、セカンドオピニオンを求めたり、新しい治療法や新薬を用いた臨床試験に参加することを考慮する。

上野さんは「9カ条」をそう解説した上で、患者さんと医療者がゴールを共有できれば、がんよりも良く向きあうことも、最高のがん治療を受けることも可能だ、と述べた。

患者さんの生きたい気持ちに医療者側は寄り添ってほしい

ご自身が乳がん、リンパ浮腫の経験があり、「リンパの会」と千葉乳がん患者の会「ねむの会」の代表として、がん患者さんの支援活動を行っている金井弘子さんの講演テーマは、「乳がん体験に学ぶ——地域でより良い医療を受けるために」。

金井さんはまず、全告知が主流になっている昨今のがん治療の流れに、疑問を呈した。

「初めて大腸がんが見つかった人に、パソコンで何10枚もの患部の写真を見せながら告知するのは、患者さんとしては、死を覚悟せよと言われているようにつらい。もっとやさしい告知の

仕方を考えてほしい」

さらに「患者はチーム医療の一員か」というあるアンケート結果を用い、がん患者さんの70パーセントが「いいえ」と答えた事例を紹介しながら、「医療者側は、患者さんの生きたいという気持ちに寄り添ってほしい」と患者さんの気持ちを代弁した。

そして、患者さん自身に対しては「身体が発信する声に耳を傾け、自分に負担の少ない生活を心がけることが大切」と語り「何かの役に立つことを通してがんであることを忘れられる喜びや生きがいを見つかる」ことで、がんらしく向きあう、心構えを語った。

このあとの第2部は、主治医との信頼関係の作り方、がんと食生活の関係、医療費の相談の仕方、事前に参加者の皆さんから出された質問に対して、上野さん、金井さんが答える形で進

行した。

がん患者さんと医療者がより良いパートナーシップを築くことが、日本のがん医療を進歩させるポイントであることが確認できたセミナーであった。

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

がんと上手に向きあうための情報サイト

がんになっても

<http://www.az-oncology.jp>

がんになっても

検索

がんになったら…。
どのようにがんと向きあっていけばよいのでしょうか？

このサイトは、多くの方の体験や想い、医療にかかわる専門家からのアドバイスを通じ、患者さんとそのご家族が自分らしい過ごし方を見つけていただけることを願い開設しています。

患者さんとそのご家族の‘希望とあたりまえの生活’の実現を目指し、医療にかかわる一員として、新薬、情報を届けるアストラゼネカが運営しています。

〈サイトで紹介する主な情報〉

高額療養費お助けガイド

医療費助成の1つである高額療養費制度についての解説、制度が適用になるかどうか、また、その際の払い戻し金額を簡単に試算できます。



体験談

がんと向きあう患者さんやご家族の体験談を紹介、募集します。

コミュニケーションの道しるべ

自身の病状や検査、治療のことなどを整理し、納得して医療を受けるためのヒント、検査・診断結果、医療費などを書き込めるノートや医療用語集も紹介します。

こころの道しるべ

診断時、治療中だけでなく治療を終えてからも不安になったり落ち込んだりすることもあります。ここでは病気と上手に向きあうためのヒントを紹介します。



がんになっても、
希望と、あたりまえの生活を。

アストラゼネカ株式会社

〒531-0076 大阪市北区大淀中1丁目1番88号

<http://www.astrazeneca.co.jp>

アストラゼネカは新薬開発をリードする世界的な医薬品企業です。

 AstraZeneca
ONCOLOGY